慶應義塾大学学術情報リポジトリ
Keio Associated Repository of Academic resouces

Title	イスラム研究の系譜と慶応義塾(二)
Sub Title	The historical trends of Islamic studies in Japan and the role of Keio University (2)
Author	三木, 亘(Miki, Wataru)
Publisher	三田史学会
Publication year	1991
Jtitle	史学 (The historical science). Vol.60, No.2/3 (1991. 6) ,p.107(281)- 130(304)
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	報告 第二回座談会 三田史学の百年を語る
Genre	Journal Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00100104-19910600-0107

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

イスラム研究の系譜と慶応義塾（二）

三木亘

それでは再開したいと思います。司会兼パネラーを勤めます。最初、私が坂本さんの話されたのに補足程度のコメントをつけるので始めまして、あとは、見えている方全体で自由に座談会を進めていただきたいと思います。

坂本さんの話されたのに対するコメントなのですが、日本における初期のイスラム世界認識で、東海散士の『埃及近世史』はぜひ入れたほうがいいと思います。第一回の座談会でも出たことですが、だいたい福沢をはじめとして三田の人々は、旧幕臣など、明治維新で追い落とされた側の知識層が全体としてバックにある。そういった中で、東海散士は会津の人なのですが、ヨーロッパへ留学しようとして途中エジプトへ寄ったところが、一八八一年ですか、オラービーの反乱がイギリス軍に鎮圧されて、イギリスがエジプト全土を占領した直後で、その事情を聞きまして、彼は、オラービーが流刑に処せられた、いまのスリランカ、セイロン島までわざわざオラービーを訪ねて、そしていろいろ彼自身から聞いたことをも含めて、『埃及近世史』というのを書いています。

このことにも示されているように、日清・日露戦争以前と以後と、日本人の世界認識は非常に性格が変わります。日清・日露戦争以前には、大ざっぱに言って、帝国主義時代の弱肉強食の世界の中で、自分たちは弱者であると感じざるをえない現実がある。それで、同じような弱者に対する関心や共感や、ある意味の連帯感情が、政府レベル、民間を問わず非常にあるわけです。ですから、日清・日露あたりから以前の日本の新聞、雑誌その他には、ポーランドの亡国、インドの惨苦、アイルランドの悲劇、そういったたぐいの世界全体の帝国主義のもとに

ある、弱小国についての情報が、ある面では実に正確に、それからある意味の感情移入をも込めて、たくさんあるわけです。福沢の歴史観、世界認識も、そうした時代背景と切離して考えてはいけないと思います。

それが、日清・日露戦争が一応勝った形で終わったので、ヨーロッパ帝国主義列強の一番下の一年生として入れてもらった、これで日本も安泰であるというような雰囲気が出てきた。これからはヨーロッパ上級生に追いつき追い越すのが課題だという、先進後進コンプレックスが、以後の日本の主潮となってゆきます。従って、そこら辺から、いわゆる弱小国、つまりアジア、アフリカ、東ヨーロッパ、あるいはヨーロッパでもアイルランドみたいなところに対する関心が非常に急速に薄れていきます。ただ、なにがしかの名残りを持ってそれを続けたのが、いわゆるアジア主義と呼ばれるような、常識的な歴史叙述では総じて右翼と一括されてしまったりするような人々が、そういう弱者の連帯感情みたいなものを持ち続けた面があります。

第一次大戦後のベルサイユ講和会議で、西園寺公望全権が人種差別反対法案というのを出していて、結局は否決されるのですが、政府レベルでさえ、ヨーロッパからのそういう差別を感じていた面があって、いわゆるアジア主義の中にそういった側面が蓄えられていくことがあります。それが、松本先生や前嶋先生もいろいろ関係のあった大川周明その他の人々にもかかわってくるわけです。それで、アジア・アフリカの民族解放運動などで弾圧され、迫害されて、亡命先を日本に求めるというような人々を実際に世話したのは、そういう右翼と総括されるようなアジア主義の人々であって、この点は、ただ右翼左翼というようなことだけでは評価できない問題がそこにはあると思います。福沢が金玉均などの世話をしたことを関連して考えてよいと思います。

そのことと関連するのですが、田中萃一郎が、決して古い時代の歴史だけではなしに、政治評論、それから東洋、西洋問わず、また大国、小国の別を問わず、アクチュアルな国際政治についてもたくさん論文を書いています。それはやはり、日清・日露以前からの明治前半期の世界に自立的な日本人の世界認識の性格をかれが共有していたことだと思います。

まさに日清・日露のころのそういった変化が学問の面にはっきりあらわれてくるのは、坂本さんがアカデミック・レベルでの研究と言われた白鳥庫吉、その門下の羽

田亨、あるいは桑原隲蔵というような、東京、京都の帝大を中心とした、日本のいわゆる近代史学としての東洋史学の官学アカデミズムが出てきたときです。このことは、第一回の座談会でも大変問題になった、ドイツから東京帝大にやってきたリースの学問的影響の性格の問題ともかかわってくることだと思います。第一回の座談会で出てきましたことは、リースは普通ランケの弟子だと言われる、しかしよく調べてみると、ランケのナショナリズム的な面はリースは必ずしも持っていなかったのではないか。彼はイギリス国制史などをドイツへ帰ってからもやっていたりして、ランケのプロイセン・ナショナリズム的なものは余りなかったのではないか。プロイセン・ナショナリズム的な面は、むしろ白鳥史学などの官学のほうにもっぱら引き継がれて、田中はそのリースに同じく教えを受けていながら、イギリス、フランスなどの学問に接近したり、取り入れたりしている。そこにやはり彼の意識的な在野性もあったのではないかということが、第一回の座談会でも出てきたのです。

そのことに関連して、松本信広先生がフランスへ留学された。明治以後の日本の学問で、ある分野ではドイツが一番の主流になり、次いでイギリスで、フランスの学問を取り入れたようなのが傍流と言いますか、ある意味では在野的な性格、批判的な性格を持ち続けた、そういうこととともかかわってくるのではないかと思います。

ナショナリズム的な面が白鳥史学に引き継がれた。これは石田幹之助さんからうかがったことですが、白鳥先生のあの時期の考え方は、ヨーロッパの東洋学と同じ舞台で対等に勝負してやろうじゃないかというお考えだったんですね。当時、内陸アジアがヨーロッパの東洋学で一番問題になっている地域で、そこへこちらも乗り込んで、幸い日本の学者には漢文が彼らよりははるかに読めるという秘密兵器もあるから、対等に勝負できるんじゃないか、そういった考えがある。こういった性格の学問レベルにおける、ヨーロッパに対して毅然として対等に何かやってやろうといった意味のナショナリズムが、あの白鳥史学の背景にあった。

これは、前述の田中萃一郎とおなじ、日清・日露以前の世界認識のありようから出た自立的なナショナリズムだったのですが、それが、両戦争後に著しくなる西欧幻想、先進後進コンプレックスの条件のもとに、後進意識のつよいプロイセン・ナショナリズムの影響とまじりあって風化してゆく。結果的にそれが研究領域を、伊藤先

生もおっしゃっていた、いわゆる塞外史、北回りの西域史と南回りの南海史で、中国プロパーがかえって置き去りにされる。東京帝国大学、京都帝国大学のその後の東洋史学の主流は大体塞外史で、それが、坂本さんもおっしゃったように、西へ西へと行ったあげく、第二次大戦前後にイスラム世界に到達するという結果をもたらす。

その点で、後で伊藤先生からお話を伺いたいのですが、橋本増吉、それから加藤繁という慶應大学にかかわりの深いお二人が中国プロパーをおやりになっていった、その背景は一体どういうことであるか、後でぜひお話を伺いたいと思います。

そして、初めに申しましたように、第一回の座談会で出ました、田中萃一郎が史学科を開く場合に、意識的に日・東・西という分科をしない。ところが、東大の場合には、坂本さんのレジュメにありますように、一九一〇年、東洋史学科をつくる。このころ、それまで朝鮮語を教えるような講座があったのが、廃止されています。非常に割り切った言い方をしますと、東洋史というのは日本帝国主義のフィールドを研究する学問で、西洋史はモデルとして追いつき追い越せの対象となる西洋を研究する学問で、それが日・東・西の分科になって出てくる。ところが、慶應のほうは田中が分科させないままをあくまで守って、その意味で、日清・日露戦争以前の世界認識につながる、在野性を持っていった面が大変あるのではないかということを考えます。

いま一つ、白鳥史学のリースからの影響について。ずっと以前に石母田正さんの批判があるのですが、リースのドイツからもたらした学問研究法というのは実証主義であった、ところが、それが白鳥史学以降になるとたんなる考証主義に堕落してしまった。清朝の考証学はこれとは違って、たいへん深い理論的な人間洞察があると思いますが。昔、私は白鳥庫吉さんの『西域史研究』というのを読もうと決心して読み始めて、三十ページぐらいで放り出したのですが、全くくそおもしろくもない。ただの考証なんですね。

次に、さっき日清・日露以前的な世界認識で、アジア、アフリカ、東ヨーロッパその他の小国、弱小国に対する関心が非常にあったということを申したのですが、牧野伸顕がオーストリア公使でウィーンに行ったときに、オスマン帝国のことをかなり研究したりしているのですが、これは、それまで日本がそれで押さえられてきている不平等条約の改正をめぐる問題にかかわっています。ただ、

アジア、アフリカを研究するわれわれとして大変残念なことは、日清・日露前後に条約改正は日本の場合は実現して、オスマン帝国、中国その他との条約では、欧米人が日本に押しつけたのと同じような不平等性を、日本が他のアジア、アフリカの国に押しつけるということをやっております。

官学アカデミズムはそういった流れでいきました。日清・日露までの世界中のあらゆるところに対する非常にアクチュアルな関心、それのイスラムにかかわる面を坂本さんが取り出してみられた面があると思うのですが、それが圧倒的にオスマン帝国に対する関心という形を取る。これには別の側面がありまして、日清・日露前後にはすでに地球は非常に小さくなって、世界中が絡まり合って動いている。世界の矛盾の焦点がまさに東アジアにあって、それが爆発したのが日清・日露戦争でした。それが一応日本の勝利という形で終わって、そこにおける矛盾は、何らかの仕方で処理された。次の矛盾の焦点が、結局バルカン、西アジアという、まさにオスマン帝国をめぐる、ヨーロッパの側からすれば、いわゆる東方問題になります。第一次世界大戦も、バルカンでのオーストリアの皇太子の暗殺から始まるわけです。

そのことにかかわりまして、第一次大戦が終わった後、当時の人々の立場からすると、現代史研究とでも言いますか、それが学問の世界でも出ております。たとえば坂本さんが紹介された以外に、去年亡くなられた、東大の駒場の江口朴郎さんの大学の卒論はサイクス・ピコ条約なのです。それから、林健太郎さんや高橋幸八郎さんも、卒論はあのあたりの外交史なのです。その後、林さんはドイツ近世史だとか、高橋さんはフランス近代史というように変わって、江口さんだけが現代史を続けていったわけです。板垣雄三さんや私などは、そういった現代史的な関心からイスラム世界の歴史に入っていった面があります。

それから、アラブだとかイスラム世界に対する関心を研究対象として意識したりする面で、松本重彦先生が大阪外語へ移られたこととあるいは関連があるのではないかと思うのですが、大阪外語では昭和十四年にアラビア科ができております。ところが、東京外語のアラビア科は昭和三十何年か、ずっと後にならないとできないのですが、これは東京・横浜と大阪・神戸の違いという面があります。東京・横浜は、欧米から工作機械や薬品を輸入して、生糸という一次加工の原料に近い製品を輸出す

る、横浜は従属国タイプの生糸輸出港です。ところが、大阪、神戸は明治二十年代のいわゆる日本の産業革命以後、繊維工業が先進的に発達して、朝鮮、満州、中国、東南アジアから、第一次大戦ごろにはすでにアラブ地域にまで繊維製品などを、大阪、神戸の商人たちが売りにいっている。関西の人は、物の考え方が福沢と同じで大変実際的ですから、そういう関連で、大阪外語のアラビア科というのがいち早くできているわけです。実学の伝統を持つ慶應にかかわりの深い松本先生は、恐らくそれに大変関係が深いことだろうと思います。

それから、前嶋先生に直接かかわることで、藤田豊八先生という方は、非常に変わった経歴をお持ちです。中国の蘇州学堂の校長を二十年くらいおやりになっていたのが、白鳥庫吉が亡くなった後、本郷へ呼び返されて、東大東洋史の主任教授になる。そのもとに前嶋先生は一番かわいがられたわけです。あと、早稲田の松田寿男、明治の神田喜一郎、それから亡くなられましたが、中国史の野原四郎という、官学東洋史の中ではずいぶんタイプの変わった一流の研究者が、藤田先生のもとから出ているわけです。ところが藤田先生はほんの三年かそこらの本郷勤めで台北帝大の文政学部開設の任務を負って台北へ行かれた。そのとき、前嶋さんは一番かわいがられていたので、おまえ一緒に来いと連れて行かれた。ところが、行って間もなく藤田先生が亡くなられて、前嶋さんは台湾で放り出された。

だいたい戦前の大学というのは、いまと違ってごく少数の人間しかいかないところです。いわんや研究者コースを歩むなどというのはほんのひとにぎりの人間です。その意味では、その時点まで前嶋さんはまさにエリート中のエリートのコースを歩いていられる。藤田先生が亡くならなければ、恐らくその後、東京帝国大学文学部の東洋史の主任教授などになられている可能性があったと思うのですが、それがいきなり、当時の言い方からすれば植民地台湾で放り出されたわけです。

ただ、結果的に言えることだと思うのですが、私はやはり前嶋先生のいまも新人類の学生諸君まで引きつける、あのみごとな学問は、やはりその辛酸があってうまれたものだと思います。前嶋さんは『東西文化の諸相』の中で自伝めいたものを書かれているのですが、それを見ますと、そこであきらめられたわけです、私はもう台湾で骨を埋めると。ですから、きょう出てきました宮本延人先生や馬淵東一さんとのかかわりもあるとは思うのです

が、台湾の民族誌だとか郷土史だとか、ほんのわずかですが、そういうことを前嶋さんはおやりになっている。結局、エリート中のエリートが放り出されたことで、絶望のどん底に沈んだけれども、台湾に骨を埋めていいというあきらめができたことで、おのずから学際的、フィールドワーク的になって、人間を見る目が非常に深く、いままで見えなかったものが前嶋先生に見えるようになったのではないかと思います。

前嶋さんがお書きになっているもの、前嶋さんの歴史は、人間研究、それも非常に具体的な個人ですね。これは、対象となるアラブ・イスラム地域の歴史に関しても、さまざまな歴史的人物、それからそれを研究するイスラム世界及び欧米の研究者などについても、徹底して前嶋先生は個人を問題にされる。これは、イギリスやアラブみたいな伝記の伝統を余り持たない日本では、非常に珍しいタイプの学問研究の仕方だと思います。イギリスやアラブでは、それから中国もそうだと思うのですが、言ってみれば個人の営為の総体が歴史であるという、原点を個人に置く歴史社会意識がありますが、日本やフランス、ドイツなどには、そういう性格の考え方は余りなかった。その中で、前嶋先生の徹底して具体的な個人を問題にされる学問スタイルは、いまでも非常に意味のあるものではないかと思います。

そのことと関連するのですが、これはきょう見えている岩見隆さんから伺ったのですが、前嶋先生の蔵書の中に、"La vie quotidienne"というフランスで出た日常生活シリーズというのがありまして、私もこれは好きでかなり読みましたが、それが五十冊ぐらいもある。このシリーズは非常におもしろいもので、いろいろな時代、いろいろな場所の日常生活が描かれています。学者・研究者として深い蘊蓄を積んでいないと、そういうものを絵画的にリアルに描き出すことはたいへん難しいわけですが、そういったものも好んで読んでいられる。具体的な個人を問題にされることと並んで、絵画的と言いますか、やはりビビッドに生きた人間の具体的な社会や生活のあり方を描き出したりというのが、前嶋先生がお書きになったものが、いまでも大変生命力を持っている非常に大きな背景なのではないかと思います。

そのことを痛切に想いますのは、一九五〇年代の後半のころ、ほとんど毎月のようにお伺いしていた永福町の先生のお宅での記憶からです。私は礼を知らない若者でしたから、フラッと勝手にお伺いして——NHKブック

スの『アラビアへの途』で、前嶋先生もかつては学生時代に先生に対して礼を失したことがあったというくだりを読んで、実はホッとしたのですが（笑）、――アラブ、トルコ、イランやイスラムに関して、本郷や神田で手あたり次第に二束三文で買って来てむさぼり読んだ幼稚な知識で、いま思えば突拍子もない質問をする。ところが前嶋さんはそれをかえっておもしろがられて、こちらの一の質問に対して十の答えをなさる。事柄によってはやれムカッダシー、やれマスウーディなどとアラビア語の原本を持ちだされて、三木さんのいまの質問にはこういうこともありますよ、などとおっしゃる。そういうことを先生もいっしょに夢中でかさねているうちに、いつのまにかたそがれていて、気がつくと敦子夫人が夕飯を御用意下さっている。

二、三年か三、四年か、そういう永福町通いのときの先生のお話しの内容がいま想いうかばないのは、それが知的に飢えてた私にしっかり消化吸収されて血となり肉となってしまったせいだと思うのですが、ただ唯一記憶してだいじにしていることは、私の質問に対する前嶋さんのお答えが、徹底していつも具体的な個人を語る形だったことです。対象とするアラブ、イスラム世界の歴史上の個人ばかりでなく、アラブ、トルコ、イラン、日本欧米のかずかずの研究者の個人、前嶋さんの歴史叙述もすべて個人の営為についての語りの集成から成っているわけで、これはほんとうに日本の歴史学の伝統のうえで稀有のことだと思います。

なお、あのころ、敦子夫人のいつもおっしゃってた口癖は、「このひとは、本さえあてがっておけば、あとはなんにもいらないひとで」というのでした。（笑）ときにはそれにもっとリアルな附録がつきました、「それ以外にはなんにもできないひとで」という。（笑）。あのころの前嶋さんはまだ三田の専任になられる前で、日本が戦争に負けて、前嶋さんの居られた満鉄もなくなって放りだされ、まったく収入もないタケノコ生活の辛苦をも嘗められた。しかも、昔アラブやイスラムを研究した仲間も雲散霧消してしまった、そんなときに、アラブ、イスラムきちがいになった若者がとびこんできて、うれしかったのかもしれません。先生の納骨のとき、御長男の登さんが、「父は私たちにとって気むづかしいおやじでしたが、あのころ、三木さんが来られた日にはきげんがよくて」と話されてました。あの永福町のお宅の閑雅なコーズリの世界は、いまも私のなかに生きています。

あと、坂本さんに三橋さんのことをお話しいただけたらと思います。

坂本　塾の古い卒業生です。松本先生より十年後輩の方です。一九〇九年のお生れですからすでに八十歳を超えておられます。

三橋先生は在学中からイスラム研究、とくにトルコ史研究を志しておられます。三橋先生がなぜトルコ史研究を始められたのか、私にもよくわかりませんが、恐らく田中先生が訳されたドーソンの『蒙古史』、あるいは那珂通世の『成吉思汗実録』に刺激されて、中国辺境の塞外史の方から、トルコ民族史をスタートされたのではないかと思います。

卒業後、私の記憶に間違いがなければ、外務省の調査部に嘱託として入り、調査マンとして研究生活を始めています。伺ったところによれば、新疆省出身のトルコ人、つまりウイグル人について、トルコ語方言のなかで、もっとも東の言葉であるウイグル語を勉強したそうです。戦後になってから、明治大学、次いで千葉大学の教授になり、研究の対象も西に広げてオスマン朝史の先鞭をつけられたことはすでにみなさん御承知の通りです。永田雄三さん、設楽国広さんのようなすぐれたトルコ史研究者を育てられたのも先生の貢績です。また、三橋冨治男先生とともに忘れてはならない方がいます。それは小林高四郎先生です。一九〇五年のお生まれですから、三橋先生より四才ほど年が上の方です。小林先生は支那文学科（現在の中国文学専攻）の出身ですが、早くからモンゴル語、モンゴル史を志され、那珂通世、田中萃一郎が先鞭をつけたモンゴル研究を発展させようとされた方です。そのすぐれたお仕事は戦後になって横浜国立大学の教授時代にまとめられた『元朝秘史の研究』、『ジンギスカン』、晩年になって出版された論文集『モンゴル史論考』に結実していることは皆様、ご存じの通りです。

この小林先生は戦中期にトルコのアンカラにある日本大使館、同じくイスタンブルにある総領事館に書記官として勤務した経験をおもちです。この在勤中に公務の合間をぬってイスタンブルにあるいくつかの図書館を訪ねて回り、イスラム史関係の現地語史料（ペルシャ語が主で、ラシード・アッディーンの『集史』が代表）の写本を調査しました。それらのうち重要なものは戦後になってから写真版として日本にもたらされましたが、これが日本におけるモンゴル時代のイラン史研究の発展にどれだけ寄与したのか、改めて言うまでもありません。

小林先生は戦争直後、帰国してから『イスタンブールの夜』という、滞在時の生々しい体験を綴った本を出版しています。これは松本清張の『球形の荒野』を彷彿とさせるもので、敗戦間際の在トルコ大使館に勤めていた人びとのさまざまな動きが書かれており、外交官の生態を生々しく映しだしていて興味の尽きないものです。

また当時、トルコの歴史学界、民族学を背負っていたキヨプリュリュ、アブドュル・カーディル・イナン、ラフメティ・アラト、ボラタウ等の錚々たる学者のプロフィールを紹介していることも貴重です。

三木　伊藤先生、さっきの加藤繁、橋本増吉の両先生のことを伺わせていただきます。

伊藤　実は私は橋本先生のたぶん最後の学生だろうと思いますが、加藤先生は私らが三田の学部に進んだときにはたぶんもういらっしらっしゃいませんでしたので、よくわかりません。ただ、ここに慶應に就職されますときの履歴書がございまして、大正六年という日付でございますから、たぶん大正六年のいつからか、五月の日付ですから、あるいはもっと後かもしれませんが、こちらで講師を勤めています。したがって、大正年間が八、九年間、それから昭和が十数年間ですから、かなり長い期間ですね。

ただ、直接加藤さんの薫陶を受けて、この方面で研究者としてその後、塾の内外で活動したという方はいない——むしろ経済学のほうの学生、あるいはスタッフに影響が及んでいると思いますが、直接史学科にはございませんですね。加藤先生は、先ほども言いましたが、貨幣を含めた中国経済史に生涯を注ぎ込んだ方で、たぶん真っしぐらにこのテーマを掘り下げられた方のようであります。

調べてくればよかったのですが、先生は余り社会的な栄誉、たとえば学士院会員になるとかいうことはなかったのではないかと思います。これだけの研究だとすれば、当然、学士院賞なり恩賜賞なりというような対象になっているはずですね。その辺、調べないとわかりませんが、とにかくそういう大きな仕事をやられたので、たぶんそれ以外のことについてはもう手を染める余裕というか、お考えがなかったのではないか。

一方、橋本先生の場合は、書経、尚書の研究をやられた白鳥庫吉さんのところで勉強され、学部の卒業論文は古代中国の氏姓の研究というテーマでしたが、ちょうど私らが予科から学部に上がってきたころに学位論文を完

成されて学位を取られた意気軒昂な時代だったのですが、そのテーマは中国古代の天文暦法学です。膨大な研究論文を東洋文庫から出版されております。これまた大変、宏翰なものです。私ら学生は目がくらむような細かい数字のデータや星座図などを広げてとうとうと弁じられた講義を拝聴しました。当時、京都大学に新城新蔵など、中国の古代の暦法天文学を専門にやっている方がいらっしゃって、こういう方と論争されながら、論文を書かれておりました。そういうことで、私の学生のころは特殊なテーマを講じておりました。

しかし、先生は一方では、今日ではやりの研究テーマになっております邪馬台国の問題に早くから手を入れられたようです。これも晩年の大きな仕事で、この校正その他で先生は命を落とされております。これは、もう一つの橋本先生の業績を語る場合には落とせないことだと思います。

かといって、橋本先生は全く天文学暦法と、いま言った邪馬台国だけかというと、そうではなくて、非常に多岐な方で、中国に渡って、例の殷墟の発掘を自分でやったりしているのです。当時、甲骨文が発見されて、これを本物とする京都大側と、これを偽物化する東大側に分かれて学問的対立がありました。橋本先生は白鳥門下であるので、これを偽物とする、偽物説を取られておったのです。松本先生などは、これはむしろ京都大学に近い立場に立っておりまして、この点でも橋本・松本の間には微妙な対立があったのではないかと思われます。そして、年令的には自分の弟子に当たる松本先生などから偽物説批判の話が出ておったりしたのでしょうか、次第次第に京都側が有利になっていったということもあってか、これを検証しようとして中国に渡られて、後崗という殷墟の発掘をされているということです。

ですから、必ずしも天文暦法学にのめり込んで、それ以外はしないというわけではないのですけれども、一つの考証学的なシナ学の伝統の中に籠られていって、その立場を生涯貫いたという形なので、なぜほかに手を染めないかということになると、ちょっと私もわかりません。

もう一つ、これはあるいは近森先生などが松本先生からお聞きになっている、あるいは江坂先生が知っていらっしゃるかもしれませんが、なぜ松本先生がパリへ渡ったか。いま言ったように、当時の学問の潮流からいけば、必ずしもパリは、当時の日本のアカデミズムの伝

統から言えば、オーソドックスな留学先ではなかった感じがあるのです。ただ、フランスではシノロジーの隆盛期でございましたから、たぶんフランス・シノロジーというものについて研究するべきだということを示唆された方が、周辺にいらっしゃったのだろうと思うのです。早くから先生はアテネ・フランセに通われて、大変語学を磨かれた。ですから、大学を卒業して間もなく普通部の教員になって、そして、先ほど出ました田中萃一郎先生が膨大な歴史の翻訳シリーズをおつくりになったときに、そのフランス語の力量を買われて、田中萃一郎先生からだと思いますが、命じられて、アンシャン・レジームですね、『フランス革命前夜』だったか、どういうタイトルだったか覚えていませんけれども……

三木　イポリット・テーヌのものです。

伊藤　テーヌですね、あの翻訳をされているんですね。ですから、フランス語を勉強していたことが、フランスに渡る一つの契機になったと思うのですが、ソルボンヌに行って、当時のオーソリティのところで勉強しようと勧めたのが誰であるのか、どういうヒントでこの道を選ばれたのか、これは私もつい松本先生から聞き漏らしているので、推測するほかないのです。

移川先生などの影響が強ければ、当然、アメリカあたりに渡るはずだったと思います。ただ、フランスに行くことを勧めたのは、田中萃一郎先生あたりではないかなという感じがいたしますね。本来、田中先生はドイツ学であるのだけれども、イギリスやフランスについて非常に関心を持っていらっしゃいましたからね。ですから、フランスのシノロジーというものの位置づけを知っていらして、しかも先生自身が民族学やフォークロアに興味を持っているということならば、パリがいいというふうに勧めたのではないかと私は想像しているのですけれども、この辺はつい聞き漏らしておる点です。

三木　ありがとうございました。

あとは全くご自由に、学生諸君も含めて、質問でも何でも、どうぞお出しください。

江坂　松本先生が東南アジア史に興味を持ち出したのはいつのことでしょうか。

伊藤　松本信広先生がなぜ東南アジアのほうに関心を持ったかということですが、これは私の半ば推測も入っているのですけれども、やはり先輩教授の橋本増吉先生を磁場にした力学がそこに働いていたのではないかと私は考えております。

江坂　フランスへ行かれる前から、東南アジア史に興味があったのかしら。

伊藤　いや、私はパリに行って、恐らく植民地であるフランス領インドシナというものの研究が盛んであったのを恐らく見てからに違いないと思います。

江坂　それでは留学前には持っておられなかったのかな。

伊藤　持っていないと私は思いますね。先生が書かれた論文を見ていますと、たとえば風土記にあらわれた、いろいろなフォークロア関係のこととか、初期の論文はほとんど東南アジアのものはないんですね。ただ、学位論文をお書きになるときに、向こうの学者の示唆を受けて、日本語と南アジア諸語、オーストロアジア語とが類似している、これをテーマにしなさいということを言われているのです。

もう一つは、副論文として、最初はアイヌのユーカラを解説しようとしていた時期があるのです。移川子之蔵さんが台北大学に移られた後、考古学教室でしたか、考古学人類学教室の整備のためにたまたまヨーロッパ視察に行ったときに、松本先生に会っているのです。そのときに松本先生は、もっと身近なものをやったほうがやりやすいぞという示唆を受けられている。それで、先生はかねて風土記の研究をしており、風土記にあらわれた山岳信仰などというのを学生時代に書いているのです。そういうこともあって、『古事記』、『日本書紀』にあらわれた神話の研究を始めたということですけれども、そのときの論文の中でオセアニアの神話との類似を示唆されているのです。それは、事実上先生の処女作であり、先生の代表作である『日本神話の研究』ですが、その中に、オセアニアの神話との比較という新しい領域がとり入れられているのです。そういうことで、オセアニアをやっている間に、次第にオセアニアの文化の源流としての東南アジアに向かってくるということで、これは一つの推測ですね。それから、先ほど言ったとおり、インドシナ植民地を持っていたフランスのインドシナ政策上の研究という成果に触れたのが動機となる。もう一つは負の力として、中国古代史では自分の研究の展開に非常限界があるということで、次第に先生の視野が南に下っていったようです。

そういう状況の中で、先生は望月軍四郎資金をもらって、三カ月余りの海外視察を命ぜられたときに、先生は中国に行かないでインドシナに行ったのです。ハノイそ

の他を回られて、そしてインドシナ研究の重要性を身をもって体験されるというのが決定的な動機になって、そのときの成果を中心にして書いたのが、岩波書店から出ています。『印度支那の民族と文化』という作品になってきている。そういうような動きだったと思いますから、私は、フランスに行く前は、ほとんど先生は東南アジアには関心を持っていなかったというふうに考えています。

江坂　そうすると、ひょっとすると、先生が大学の学部の最後のときじゃないかと思いますけれども、槇有恒さんなどとモンブランに山岳部で登って、それで帰りにパリなんかを回られているんですね、そういうことがきっかけになっているかもしれないですね。私は先生がモンブランへ登ったとき、槇さんともう一人の友人と三人で白いヘルメットをかぶって写した写真をいただいています。

近森　松本先生はクーランジュを読むことを田中萃一郎先生に勧められたとおっしゃっていました。

江坂　『古代都市』ですね。

三木　それは第一回の座談会で出てきたのですが、大正十四年に田中萃一郎が「泰西歴史名著翻訳叢書」というのを刊行しはじめまして、その中にクーランジュの『古代都市』、ギゾーの『ヨーロッパ文明史』、ブライスの『神聖ローマ帝国』、ブルクハルトの『ルネッサンス』、それからさっきのテーヌなどの、当時としてはヨーロッパの学問の一番先端をいくようなものがあります。

伊藤　その中のクーランジュのあれは、鈴木泰平さんのお父さんじゃないですか。たぶん西洋史の教授だった鈴木泰平先生のお父さんが、『古代都市』の最初の翻訳者だと私は思います。これは確認しないといけませんが。当時、さきほど言った、泰西のトップクラスの名著を田中先生が自分の身近の若い人々に訳させていた。当時としては、私大の一史学科の仕事としては画期的なことだったと思うのです。

家島　さき程、松本先生がフランスに留学される以前のことが話題になりましたが、松本先生はパリに留学されているとき、当時のフランスにおける東洋学、とくにイスラム研究に非常に関心を持たれていたのではないかと思います。そして先生は日本におけるイスラム研究の必要性を強く感じられていたのではないでしょうか。そうしたことは、推測ですが、前嶋先生が慶應義塾にいらしたことと、どこかで関わっているのではないかと私は考えるのです。当時のフランスでは、E・シャヴァンヌ

やP・ペリオ、G・フェランなどの、そうそうたる東洋学者たちが活躍していました。とくに、先生は、J・T・レイノー、B・メイナールやG・フェランの研究に注目されて、それらの著作や論文をよく集め、よく読まれています。そうした本を先生から私は直接借りたことがありまして、よくそういうものをお持ちになっているなと感心したことがあります。先生は、イスラム地理書・旅行記に出てくる東南アジアや中国に関する記録をもっと利用・分析することの必要性をいつも説かれておりました。

前嶋先生のことで少し話させていただきます。前嶋先生の学問をどのように呼ぶかということを私、時々考えるのですけれども、単にイスラム学でもないし、西域学や東西交渉史という枠をもっと超えていると思うのですけれども、一応「前嶋史学」というふうに呼んでおこうと思うのです。前嶋史学を考える上で、先生が特に東大に入られた大正の末期から昭和の初めのころに、どういう先生方に学ばれたかということを最初に考えなければいけないと思うのです。

先ほど、坂本さんがお話になられたことですが、白鳥庫吉、藤田豊八、それから当時、蒙古史の専門家で箭内亙という方がおられて、こうした先生方から東洋史概説とかモンゴル史、西域史などの、いわば中国の周辺史を多く勉強されています。また東大に入学される前には、当時の東京外事専門学校（東京外大）の仏語部（フランス語科）に学ばれております。

東京外事専門学校に在学のときには、まだ歴史学を勉強しようとは恐らくお考えになっていなくて、むしろ外国文学に広く関心をおもちになっていたと思います。それが、フランス語を学び、フランスの諸学問、とくに東洋学と接せられる機会となったことが、先生のそれ以後の学問傾向に非常に大きな影響を与えているように私は感じます。それは、先ほどの松本先生との出会い、イスラム学に対する両先生の共通のご関心、そうした結びつきによって、前嶋先生が慶應義塾にいらしたのではないかと思います。

前嶋先生に関わることで、もう一つ。先生は、松田寿男先生とは東大の東洋史の同窓であり、学問的にもつねに張り合い、おたがいに切磋琢磨しながら研究を進められてきたと思われます。松田先生は中央アジア史がご専門で、漢籍を中心とした厳密な考証学に基づきながら、同時に歴史地理学的な新しい視点・手法を持って「中央

アジア学」をうち立てられた方です。いっぽう、前嶋先生が中央アジアを飛び越して西アジア史に直接研究関心を向けられたというのは、どうも松田先生という学問上のライバルがいたからではないかとも私は感じています。前嶋先生の学士論文は先ほども出ましたように、「カスピ海南岸の諸国と唐との通交」であります。その論文では、フランス語訳のアラビア語史料を多数使われて、漢籍史料よりもアラビア語史料の方を重視した、新しい東洋学を打ち立てようとされたと思うのです。

それから、台湾に行かれた話が先ほども出ましたけれども、先生は藤田豊八先生に呼ばれて、昭和三年に台北帝大に赴任されます。しかし、しばらくして藤田先生が亡くなり、台北帝大をやめられて、いわば失意の境遇に置かれたわけです。台南の中学での八年間が先生の学問の上でどの様な影響を与えたか、私はわかりませんけれども、その時の鬱積した気分を一気に晴らす意気ごみで東亜経済調査局に入られて研究に没頭され、研究会とか、あるいは年報、月刊雑誌のなかでつぎつぎに論文を発表されています。私は最近、先生が調査局におられた頃に発表された論文をいくつか読みましたが、それらは勿論、戦争の影響が強く感じられますが、非常に生き生きとしており、新しい視点を随所に感じる論文をたくさんお書きになっていること、したがって、この時期の先生の重要性を私は感じているわけです。

最後にもう一点をのべさせていただきます。先生は数十点の著作がございますし、論文も数百点ございますから、その中で代表的なものを選ぶことは大変難しいと思うのです。しかし私は、先生の学問傾向をつかむ上で三つの代表的な作品が挙げられるのではないかと思います。その一つは、先ほども申しました学部の論文「カスピ海南岸の諸国と唐との通交」（『史学雑誌』三九―十二）、第二は先生の博士論文『タラス戦考』（『史学』三一―一～四、三二―一）です。これは博士号論文では別の名前がつけられていますね。その内容は中央アジアのタラス川河畔での唐朝とアラブ・ムスリム軍との軍事的な衝突がどういう原因であるかということを詳細に究明されたわけです。この論考ではアラビア語史料が実に豊富に使われて、漢籍史料の内容を見直すという厳密な史料分析が試みられています。

第三番目は、先生がフォードの給費研究員としてシカゴ大学、プリンストン大学、それからヨーロッパを回られて、一年半ですか、海外で研究され、お帰りになって

二年後に、その成果をまとめられた「テリアカ考」（『史学』三六―四、三七―三、三八―四）という論文です。この論考は、日本ではとても手にし得ないアラビア語の写本史料を先生が調査・発掘され、それらを豊富に使われたことからみても、先生にとって全精力を傾けた大変な力作ではないかと私は思います。その後、『アラビヤン・ナイト』（一～一二巻）という大きな訳業がございますけれども、私としては、先生のいろいろな時期での学問の変化と展開を考える上で、以上の三つが代表作ではないかと考えております。

三木　どうもありがとうございます。

可児先生、学部は経済学部だったわけですが、羽原又吉先生がどういうお仕事をなさったか、お話しいただけませんか。

可児　羽原又吉先生は、私の記憶ではたしか、浅草から新橋まで馬車鉄道ができた明治十三年生まれの人なんですね。（笑）それで、宇野修平さんなどの世代のお弟子さんには厳しかったのですけれども、私などの世代は門下のうちに入れてもらえないというか、勉強など余り教えてくださらなかったので、先生の学問を語るというようなことはとてもできませんけれども……。

私の記憶に間違いがなければ、たしか昭和二十五年に慶應においでになって、経済学部で経済史をお持ちだった方です。二十五年に朝日文化賞を受賞され、同時に、『日本漁業経済史』という岩波から出た全四冊の著書で、経済学部で経済学博士をお取りになっているのだと思います。三十年には学士院賞を受賞されております。私はちょうどその前後の学部学生だったことになるのですが、その後昭和三十二年に、『日本近代漁業経済史』（岩波書店、全二冊）が出ております。けれども、そのころは漁業経済史は全然おやりになっていなかったのです。

先生ご自身はそもそも東大理学部の前身、理科大学の動物学教室の出身で、プランクトンの専門家なのです。最初の任地が北海道の水産講習所で、いかにして魚を増やすか、いかにして魚を取るかということが御仕事でいらしたのですが、後に北海道から東京に帰っていらして水産講習所の教授となった方です。そのころから非常にお変わりになったようです。つまり魚を取ったり、あるいはふやしたりするということは、生産者にとっても、消費者にとっても決してハッピーなことにならない。魚を取る人も、それを売る人も、それから食べる人も人間なんだという原点に立戻って、抜本的な水産行政を確立

しなければいけないというところから、すっぱりプランクトン研究など水産学をお捨てになって、農業経済史に対応する漁業経済史研究に転向されたのではないかと思います。

私なども一度しか読んだことがないのですけれども、公務の余暇に執筆された『漁場及魚市場論』（水産書院、大正三年刊）という著書があります。欧米の漁港、魚市場を詳論し、日本の魚市場のあり方を示唆した著書です。いまでいう水産庁の役人でありながら、狡猾な手段を商才としていた魚市場の弊害にたいする挑戦をしたものだといってもいい本です。その後、丹念に古文書を写して全国の漁村を歩かれるわけです。私、一度拝見したことがありますけれども、丹念に写した文献の山がうず高くつまれておりました。それが学士院賞とか、あるいは朝日文化賞の一部材料になったものだろうと思います。

同時に、漁師も魚商人も消費者も皆人間だというような発想から、歴史だとか人類学、民俗学、考古学、そういう分野に非常に興味をお持ちになったことから、松本信広先生などとのふれあいが生まれてくるわけです。しかし、羽原先生は、わしは自然科学の出身であり、人文、社会科学では後学であるから、自分よりどんな若い人であっても頭を下げて物を聞くのだという徹底した態度で通しておられたようです。同時に、三田校舎のすぐ裏に渋沢敬三さんのアチック・ミュージアムがあったものですから、そのアチック・ミュージアムや、あるいは松本信広先生との関係などで、広い分野の勉強をされたのだと思います。

ですから、私どもは漁業経済史の時間に出席いたしますと、君、もう漁業経済史なんかやったってしようがないよと、さっぱり漁業経済史のことを教えてくださらない。「魚は取り尽くしたっていいんだよ、魚がいなくなったときには、その次に何を食べるかと考えるのが人間だ。昔、マンモスがいたころを考えてごらん。マンモスがいなくなったからって人間は滅びないだろう、そのときに農耕、牧畜という新しい適応手段によって克服したのだ」、と諄々と説かれた。これが、先ほど言った馬車鉄道時代の先生の発言なので……。（笑）

そういう発想が私どもは非常に新鮮であって、御退職された後までお教えを乞うていたのです。お子さんがおられなかったこともあって、若輩にもうるさがらずに接して下さったのだと思います。長いこと鎌倉にお住まいでしたけれども、停年制のない時代の、年配の先生です

から、授業が終わりますと、私は一番年下だったもので、先生を東京駅までお送りして、グリーン車にお乗せして、それから、いま何時何分の横須賀線にお乗りになりましたからと、お宅へ電話したというようなことをいま思い出しました。ときたま帰りに神田の古本屋へ寄ると、なにしろ明治時代の書生さんなんで、奥へ入っていって、本なんか定価を無視して、これ幾らにしろとか自分で値段を決め、さっさと持ち帰ってしまう。（笑）本屋のほうもそれになれていて、あきらめている。そういう意味では非常に貴重な明治の体験を（笑）させていただいたのです。

斯道文庫の尾崎康さんは実は私よりも羽原先生のまた違った面をご存じのはずです。尾崎さんは新婚当時、羽原さんのお宅の離れを占拠していましたので。私どもが勝手に回想いたしますと、専門領域を崩すという時代を先取りされたこと、つまり研究者が専門の知識の狭い集積だけで職人的になることを極力嫌っていらした研究者だと思います。ただ、専門領域を壊したときに、その壊した分だけ体系化が阻まれるという点では、私は大変不遜なことを申しますけれども、先生は余りガードがなかったということを感じます。漁業経済史の父と仰がれる先生の業績をそこなうものではありませんが。ともかく松本先生の周囲におられた方のお一人だったということは事実だと思います。そういう関係では、渋沢先生のところにアチック・ミューゼアムの方がいらっしたり、速水さんなどはその人脈はよくご存じだと思いますけれども、松本先生をめぐる山脈としてノートしておいていい方だろうと思います。

三木　どうもありがとうございます。

岩見隆さんが見えてますが、前嶋先生や井筒先生についていかがですか。

岩見　言語文化研究所でアラビア語を担当させていただいております岩見と申します。いま図書館のお手伝いをさせていただいているものですから、前嶋先生のご本を拝見いたしまして、その印象と申しますか、大ざっぱなことを申し上げてお許し願いたいと存じます。

まず先生のご本は、家島先生がよくご存じと思いますが、家島先生のお話では、とにかく先生は絶対書斎には人を入れない方だったと。もちろんご本をたくさんお持ちなのはよくわかっているのですけれども、具体的にどんなご本をお持ちなのかを拝見できるというのは、私どもにとって非常に幸せなことでございました。先ほど三

木先生がおっしゃいましたが、まず目を引きましたのは、“La vie quotidienne”という叢書がずらっと揃っていることです。もう一つは、地図のたぐいを非常にたくさん集めておられた。これは両方とも、前嶋先生の絵画的なと申しますか、非常に明晰な論文の印象とも、私なりに一致した印象を持ったわけでございます。あと、先生のこれは一種の稚気と申しますか、そういう面を象徴するのかもしれませんですけれども、ジュール・ヴェルヌの本を五、六〇冊持っておられた。しかも、研究書まで持っておられる。それから、コナン・ドイルもずいぶんお読みになったようですね。こういうところですね、これはやはりとてもおもしろいところだと思いました。アルセーヌ・ルパンはなかったように思いますけれども。（笑）

次に、私の主として関心がございますアラビア語の本について申しますと、正直言って、非常に有名な、もう評価の定まっている本が集まっている。これは別に前嶋先生を悪く言うつもりはないのですが、実はこういう本の集まり方は、初歩の人の本の集め方ですね、入門者的な。専門家の本の集め方というのは、もっと得体の知れない、雑多な本がたくさん入ってくるものだろうと思います。ところが、前嶋先生のアラビア語のご本にはほとんどそういうものがなかったのです。私はこれは、やはり西アジアに関する前嶋先生の学問をよく表わしていると思うのです。つまり前嶋先生のこの方面での学問は、アラビア学への戸口に立った開拓者の学問と申しますか、その立場が非常にはっきりあらわれているのではないかと思ったのでございます。

坂本　ただいま岩見さんから図書の話が出ましたが、実は私、前嶋先生がお亡くなりになってから、所蔵の本を整理し、塾の図書館に入れるまでの一切の事柄に関わりました。仲介する古書店の倉庫が群馬県の館林にあったのでそこまでわざわざ行き、かれこれ二週間ほど泊りこんで、それこそ埃にまみれて区分けをしました。はじめて前嶋先生の蔵書の全貌が明らかにできるので期待で胸が高鳴ったものです。大変な仕事でしたが、それだけに愛着もひとしおです。これらを通じて私が感じとった前嶋先生の蔵書の性格を言わせてもらいます。

アラビア語の本に関しては、岩見さんがおっしゃったとおりで、確かに基本的なものしか揃えられていません。ただ、前嶋先生が置かれていた時代は、アラビア語の本を、いまのように直接現地から取り寄せることが不可能

でしたし、オランダのブリルのような書店からしか輸入できなかったのですから、これは仕方のないことだと思います。

私が前嶋先生の図書にとくに興味をもった点は、むしろイスラム関係以外の本をどういう風に集めておられるか、ということでした。学生時代から私も前嶋先生の書斎はぜひのぞいてみたいとは思っていましたが、ついぞ一度も足を踏み入る機会がありませんでした。お亡くなりになってから、ようやく整理をするということで初めて前嶋先生が苦労して集められた宝の山をこの目で実際見ることができたのです。前嶋先生は歴史家であると同時に文学者であるという面を持っていましたから、文学関係で前嶋先生がどういう本を集めておられるか、この点こそもっとも確かめてみたいところでした。前嶋先生の文学観はある意味で特異なところがあります。私なりに幾つかに整理しますと、第一に叙情性にひかれるところがあります。たとえばフランスのドーデーなどの本がこれに入ります。それから、これは小説ではありませんけれども、竹久夢二なども好きで、何冊もかれに関係した本が集められています。いずれにしろ叙情的なものを非常に好まれる先生でした。

第二に、エキゾチズム、冒険といったジャンルのものがあります。これに関係するものとして、先ほど岩見さんが挙げられた、ベルヌの本があります。私もこれらが五十数冊、フランス語で揃えられているのには驚きました。

さらに、カール・マイというドイツの有名な作家がおりますが、（この人の本の一部は、『秘境クルディスタン』、『悪魔崇拝者』などが日本語に翻訳されています）彼のものがドイツ語でちゃんと揃えてあるのには感嘆しました。

第三番目のジャンルに、伝奇、怪奇といったジャンルがあります。こういった関心から、エドガー・アラン・ポー、日本のものでは国枝技郎、夢野久作、久生十蘭といった系統のものが丹念に集められています。それからこれらの延長線上に関係のものがあり、もちろんアラビヤン・ナイト関係のものもあります。

最後に、日常の庶民生活にも興味を持っておられて、ディケンズなどのものが非常に多く集められています。これに関連して、永井荷風の小説類もあります。

あと、非常におもしろいなと思ったのは、伝奇、怪奇に連なるものだと思うのですが、オランダ人で、中国大

使を勤めたことのあるフーリックの、中国を舞台にした小説が結構あることです。フーリックを前嶋先生が着目されたことは非常に素晴らしいと思います。前嶋先生に教えられた本で『迷路殺人事件』というのがありますが、そういうものを早くからお読みになっている。つい最近、平凡社から二冊ばかり、フーリックの中国から題材をとった推理小説が翻訳されましたが、前嶋先生の先見性に改めて関心させられました。

三木　小川先生、何か一言いただけませんか。

小川　いまの坂本さんお話や岩見さんのお話を聞いていて、私もつくづくそうだなと思ったのですが、それは前嶋先生の文学者としての側面です。私は西洋史でしたから、前嶋先生とそんなに親しくおつき合いできなかったのですけれども、授業に出たり雑談をしたりして、前嶋先生にはやはり人に真似のできない、歴史家として他人に伝えられない個性的側面が非常に濃かった。つまり、文学者というか、思想家というか、そういう側面があって、いつまでもそちらにご自身も執着しておられたのではないかという気持ちがします。

私が前嶋先生の本を初めてお読みしたのは、『玄奘三蔵』という本なのですが、あの冒頭あたりは『方丈記』の冒頭を思わせるような名文句がずっと並んでおります。次に読みましたのはルネ・グルッセの『アジア史』（クセジュ文庫）、あれも非常な名文で訳されております。ルネ・グルッセとどこかでお会いになった思い出が書かれていますが、その風貌の描き方が非常に文学的です。そういうふうに、前嶋先生には普通の歴史家にはないような、文学者としての才能が非常におありになったのではないか。前嶋先生の論文、たとえば『テリヤカ考』などを読んでも今、科学や社会科学の枠組では評価し切れない面を持っておられる。先生にはむしろ伝記とか概説書とか、あるいは東西交渉史の本とか、あるいはまたイブン・ハルドゥーンについて書かれたものとか、そういったものから読み取るしかないものがあって、それは前嶋先生固有の才能で、われわれに能力として伝えられなかったようなものをお持ちだったのではないか。私が懐かしいのはそういう点ですね。これまでに近山金次先生のことが出たかどうか知りませんが、恐らく近山先生はわれわれの間から完全に忘れられた歴史家になっています。六十代で亡くなったということもありますが、私自身は近山先生が指導教授だったものですからいつまでも思い出すのですが、授業に出たり、書かれたものを読

んでみますと、ストーリー・テラーというか、物語り手としての能力をお持ちなんですね。これは私自身も受け継ぐことができなかったし、先生に教えられたほかの先生方にも受け継がれていない、文学者としての能力の一つではないかと思うのです。先生ははじめのうち仏文学志望であったとお聞きしています。そういう点で、近山先生と前嶋先生にはどこか対照的な面もありますが、私ども後輩に受け継がれなかった歴史家として特別の才能をお持ちだった方として、私はいつも記憶しております。そういう能力は、われわれにとってどういう価値があるのだろうか、それを常に考えていないと、近山先生のような方は忘れられた歴史家になってしまうのではないかという気がいたします。

三木　可児先生、あるいは伊藤先生にお伺いしたいのです。三田には、先ほど可児先生がご紹介くだすった羽原又吉先生をはじめとして、松本信広先生、さらには可児先生ご自身ですね、海洋世界、あるいは漁労文化、松本先生の黒潮文化論、こういったような海、あるいは南のほうの海に非常に関心を持った方がずっといらっしゃるように思うのです。これは、戦時中あるいはそれ以前に、満蒙開拓などで官学が内陸アジアとか大陸に関心を持っていった方向とは非常に対照的であるように思うのです。松本先生がひっぱって来られた前嶋先生も、日清・日露以降の官学史学としては例外的な南海史をはじめられた、藤田豊八先生の愛弟子でした。

こういった流れは、当時の民間史学と言いましょうか、竹越与三郎などに象徴されるような、やはりこれも三田の史学者ですけれども、竹越与三郎の南島論などにつながる、在野性というようなものを象徴しているのかどうか、そんなところをご感想を伺いたいと思いますけれども、いかがでしょうか。

可児　三木さんのいまのご発言に、私の本当の感想ですけれども、羽原先生などは農村研究に対する漁村研究というのが常に頭にあったのだろうと思うのです。野村兼太郎先生などの影響だと思います。あるいは野村先生などの関係で羽原先生が来ていらっしゃったというべきかもしれません。

農村研究と漁村研究を比べますと、漁村研究のほうが、はるかに理論的な面が薄くて済むと思うのです。農村研究というのは、土地所有制度だけでもえらい大変なことで、まかり間違えばそれから一歩も出られず一生終ってしまうということがあると思うのです。ところが漁村研

究は、入会権とかありますけれども、農村研究に比べたらスッと入っていけて、手続がめんどうではない。それは私のことで、ほかの先生のことは知りません。

このことを、もう少し拡大して申しますと、三田の史学には、そういう理論的なものは昔から伝統的に少ないのではないかと思うのです。神山先生のような方がおいでになりますけれども、歴史を理論的にやるという面は非常に弱いのではないかと私は思うのです。これがネガティブな意味での一つの伝統ではないか。私はそういうことをも関係があるのではないかと思っています。松本先生は学際的ということを早くからおっしゃっていましたけれども、それに伴う理論的なことは僕らは余り伺った記憶がないんですね。この座談会は別に過去を回顧しているだけではなくて、今後の展望ということが問題だと思いますので、あえて申し上げたのです。もし私が間違えていたら、どうぞご指摘いただきたいと思います。

三木　これはわれわれの通弊で、終わりごろになると俄然おもしろい話がいっぱい出てくるという……。ただ、予定の時間がもう六時になりましたので……。

先週の第一回に続きまして、近代日本史学史の中での三田史学というのがかなり浮かび上がってきた感じです。意識するとせざるとにかかわらず、近代日本史学史の中で在野性をかなりみごとに貫いてきた。もちろん可児先生がおっしゃったように、いろいろ弱点も当然あると思いますが、そういった点はかなり浮かび上がってきたと思います。

それと、第一回のときにも感想として申し上げたのですが、名前の挙がったような先生方は、やはり何らかの新しいジャンルを開拓されたり、あるいは新しいパラダイムを提出されたりした、そういった意味で大変スケールの大きな先生方です。いま世界中がまた乱世になろうとしておりまして、いままでのパラダイムが全部だめになりまして、われわれは新しいパラダイムをお互いに探し求めているのが現状だと思うのです。そういうときに、かつて新しいパラダイムを提出されたり、新しいジャンルを開かれた先生方の三田史学の百年を活字にして出すことは、私としては大変意味のあることだと思っております。日本のみならず、世界じゅうの人びとが、何のモデルも海図もない未知の時空の大海に乗りだしてゆくいま、われわれ自身の学問を見直して、今後の三田史学をわれわれがさらに豊かにしていくきっかけとなればと思っております。

――閉会――